

思いを継ぐ（繋ぐ）

―「大正生まれの星一つ消ゆ」：堀江正夫先生追悼文―

河野 学 陸自81

―「何としてでも戦友のご遺骨を家族の元へ！―

1 二〇三高地

○ コロナ禍のプレゼント

コロナ禍の2021年の4月、私が従事する中国で行う事業が2年ぶりに再開された。渡航者の受け入れ地は、明治時代から日本と縁の深い遼東半島大連である。事業が開始されるまでに大連で2週間、事業を行う吉林省で2週間の隔離があり、部屋から一歩も外に出ることはできない。その間、数回のPCR検査で全員の陰性を確認し事業が始まる。大連は日露戦争の天王山の旅順港、二〇三高地がすぐ近くにあり、学生時代に『坂の上の雲』を読んで感動した私は、一度は訪れてみたい場所だった。だが隔離などで日程がうまくてしまい行く余裕はなく、残念な思いしきりだった。事業は3カ月、帰国も大連からで当初は大連に到着後翌日帰国の予定であったが、

PCR検査の関係で1日の余裕ができた。思いがけないプレゼントに心が躍り、直ぐに仲間3人で旅順ツアーを申し込んだ。約1カ月の隔離に耐えたご褒美かなとその幸運に感謝した。

○ 二〇三高地

季節は6月末、旅順は北緯38度で岩手県とほぼ同じ。山々の木々は若葉の季節を過ぎ、その盛りを競うように萌えていた。最初は堅固な要塞の東鶏冠山、要塞攻撃の要諦は敵の一弱点に全力集中する「穿貫突破」しかない。しかしながら、日本は要塞攻撃の歴史がなく単調な攻撃の繰り返しとなり、明治を生きた若い多くの兵士の命が散った。次にロシア軍降伏後、乃木將軍とステッセル將軍の停戦の条約が締結された水師営「水師営の会見」で有名。その情景は『坂の上の雲』に詳しい。元は劉という百姓家であり、「水師営の会見」の歌に出てくる有名な一本棗が庭の片隅に植えられているが、当時の木ではなく施設保存のために新しく植替えられている。ここは、戦闘中日本軍の野戦病院に使われていた。会見が行われた土間はここ、粗末な机（元手術台）、椅子、土の

壁が当時の面影を偲ばせる。この地を乃木將軍も踏んだ。私は116年の時を超えて感慨一入であった。私のメインは、この戦闘だけで1万5千名の兵士が散った二〇三高地。

麓の駐車場に着き麓の8合目付近までカーブで行く。それから頂上まで急な坂を徒歩で登る。二〇三高地は二つの峰に分かれている。当時の山容は禿山（余りに激しい砲爆撃のため標高が3割減ったとも言われている）。今は緑濃い木々が連なる豊かな森。この高地は旅順港を一望に見渡し、ロシア旅順艦隊を正確に射撃できる。3回に亘る総攻撃により奪取し、日本から急遽持ち込んだ28センチ重砲の砲撃により旅順艦隊は全滅、勝負を決した。残念ながらこの日は霧がかかり、また木々で視界が遮られその状況を確認できなかった。8合目から二つの峰の鞍部に登り当初北東角に、それから鞍部に戻り南西角に、歩いた距離は1キロにも満たないが急坂であり軽装であつても汗をかいた。砲撃やMGの火力に曝されながら若い兵士達は一途に山頂に突撃した。彼らはその時何を思ふ必要の敵に向かったのか？ きつと小さい頃の母の想い出、そして帰

りを待つ妻や子の顔が浮かんだに違いない。

〇 爾靈山

北東角には、この地で次男保典が戦死した乃木將軍の有名な「爾靈山」の碑がある。これは二〇三高地を陥落させた後、激しかった戦闘を振り返り、勇ましく戦った兵士達と多くの英霊への思いを詠った詩である。爾（あなた）の霊を鎮めるという意味がある。乃木將軍の漢詩「爾靈山」… 爾靈山險豈難攀 男子功名期克艱 鐵血覆山山形改 萬人齊仰爾靈山（二〇三高地の要塞が堅固とはいえず、よじ登れないことはないはずだ。男子たるもの功名を立てようとするならば、いかなる苦難にも打克てる筈だ。我が軍が激しく打ち込んだ砲弾と兵士の屍が山を覆い、山の形まで変えてしまったほどだ。だが遂にこれを陥落させた今、多くの人々と万感の思いで爾（汝）の霊の山を仰ぎ見ている）

絶句の法を無視して初めと終わりに「爾靈山」を2回用いているのは、この3字に無限の痛切な心情を込めているからに他ならない。これがこの詩の眼目、正に血を吐くような一語であると言われている。

二〇三高地は、今全山が公園となつている。桜の名所で春には白とピンクの花園となり、多くの人が出で賑わうという。桜の苗木は、旅順で亡くなった兵士達の遺族会が寄贈したものである。祖国のために勇敢に戦った兵士達の少しでも慰霊になればとの思いで植えられた。今、戦争から116年以上が経過し、訪ねる遺族も少なくなつたに違いない。ただ大連市は今でも日本と縁が深く、

また人気のツアーなので多くの日本人がこの地を訪れるが、ロシアの下を防ぐため勇敢に戦い約1万5千人が戦死したこと、そしてその後の奉天会戦までの先人の苦勞をどこまで知っているのだろうか？ 今を生きる人がそのことに感謝し、毎日を真摯に生きているのか？ 改めて考えさせられた1日であつた。

〇 自分にできることは？

私は65歳となつた。2022年3月が2度目の定年である。今回が最後の中国出張になるかも知れないという思いがあつた。人生100年と言われる時代、これから何をすれば？ それを考える機会でもあつた。戦史に興味があり、富士学校戦史教養班長として硫黄島の学生教育

に2度ほど統裁官として携わり、いつの日か先人の慰霊及び遺骨収集に携わりたいという思いがあつた。しかし踏み切れないでこまど来た。まだ気力・体力的に大丈夫？ 残された人生をやりたかつたことに踏み出したいという思いがあり、今回の二〇三高地を訪れて更に募り帰国した。帰国後も2週間の自宅待機、その間『坂の上の雲』を読み直した。満洲の荒野で国家存亡の危機感を上下一体となつて共有し、強大なロシア軍に立ち向かつた先人の偉大さに改めて頭が下がる思いがした。

一方、遺骨収集事業に関係する法人にも電話をし、現在どんな活動が行われているか情報収集に務めた。そんな時、『偕行』（2021年8月号）終戦記念日特集のある記事が目にと留まった。陸士55期古川久三男氏を父に持つ浅野葉子氏の「父と娘の旅」の旅。そこには父の精神ルーツを知る旅の色々な思いが綴つてあつた。その内容に感動した。そこでニューギニアの地で師団、軍の参謀として活躍され現在105歳、今も健在なだけでなく「戦友のご遺骨を家族の元に」の執念で活動を続けら

れている堀江正夫先生のお話を直接伺いたいと思った。

2 堀江先生との邂逅

○ 在京日南会

2011年に自衛隊を退官して中国の事業に従事する傍ら、今まで余裕がなくてできなかったことをやりたい、まずは少年時代を過ごした故郷との繋がりを持ちたいと思った。私は宮崎県日南市出身、高校の同窓会で「在京日南会」があるという話を聞いた。早速入会すると毎年約

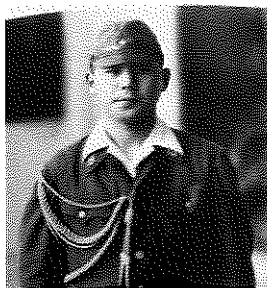
200名位が参加する田舎訛りの会だった。飴肥、細田：と地区毎テールが分かれており、もう何十年と会っていない地区の人、兄・姉の同級生そして幼稚園の恩師の娘さん等本当に懐かしい人に再会、昔話に花が咲いた。そして事務局には幼馴染の昭ちゃんの兄の幸二さん、そして長ちゃんの兄の憲司さんがいた。会の設立は1967年、今年で55年目を迎える。当時、星雲の志を持ち上京した省庁等に努める有志が発起し、「故郷と彼ら同士」の絆を深める目的で設立されたという。往時その名簿数は2200名を数えた。私が入会した2012年頃56代目会

長が昭和37年からNHKの「きょうの料理」で活躍された料理研究家の堀江泰子先生。日南の城下町飴肥出身（小京都で有名）で祖父は貴族院議員高橋源次郎氏。林業で一代を築かれた。日南の名士で折に触れ母から名前を聞いていた。高校の土地は「源次郎さんが寄付した」という話も聞いた覚えがある。母は先生の新聞連載記事を切り抜き綴じていた。母はファンだったのか？ テレビで料理教室を見ていたのかも知れない。

○ 堀江先生

そのご主人が堀江正夫先生だった。大正4年新潟県糸魚川市に生を受けられ、7、12歳までの5年間で樺太で過ごされた。陸軍幼年学校、士官学校（50期）を経て、昭和17年に先生の母の面影を強く感じられた泰子さんと縁があり結ばれた。今も頗る健康であるが、幼年学校当時までは丈夫な体ではなかったそうである。任官後は中国の徐州会戦に出征その後中隊長として14回の戦闘を経験された。

陸軍大学校卒業後、18年12月ニューギニア戦線の第51師団参謀として現地に赴かれ、また少佐に昇任後第18軍参謀として、猛将として愛



昭和18年ニューギニア出征前

情深き聖将として有名な安達二十三（二〇三高地に由来があるのだろうか？）軍司令官に仕えられた。昭和21年1月に復員後自衛隊に入隊まで、奥様の故郷日南市飴肥で過ごされ、その間林業に従事された。27年入隊後は、初代都城の連隊長、陸幕の部長等を歴任され、西部方面総監を最後に退官された。退官後は、参議院議員2期を務められ防衛行政や英霊の帰還事業に多大な尽力をされた。

初めての出会いは、2013年の日南会だった。日南会の顧問として出席されるが、上京の日南市長等皆が絶え間なく話されるので中々近づけず短くご挨拶したが、戦史に興味があるというお話をしたら、是非自宅に來なさいという事で堀江家恒例の年末の餅つき、それから2回程伺って色々なお話を伺った。ここに

も不思議な縁があった。日南で林業に従事している時に酒谷地区の山の世話を託す「次郎ドン」（本名：治郎吉）という人がいた。私の高校、防大、そして最初の赴任地市ヶ谷の連隊の後輩の井君のお爺さんだった。今も同じ会社で勤務し共に日南会に入会した。先生は3年前まで陸自幹部学校で、「統率」の正式な講座を担当され、年に1回3時間教育に行かれていた。当時井君は幹部学校の戦史教官室長で、そのことを知らずに先生に挨拶したが、二人で自宅を訪問し故郷の話の時に初めてそれが分かった。

○ 「信と愛」…自衛隊時代

自衛隊時代について興味深いお話を数多く伺ったが、その中で印象深い話を紹介する。ニューギニア等の戦場体験等から、自分の生き様を反映しようと貫いたことを一つだけ挙げておいたら、それは「信と愛」だと強調された。部隊の強弱は全て指揮官にかかっている。指揮官はその任務を遂行できる能力と責任感が勿論大切であるが、根本はどのよう下部下と結びつくか本当に真に一体とならなければ駄目だと訓えられている。その具体例として、昭和37年の

4月に都城の初代連隊長として赴任された時の話をされた。先生は、中隊長と主要な幕僚と一人1時間をかけて二人だけで腹を割つて話された。そして中隊長には1週間営内に泊まり込むことを命じ、部下隊員全員と一人ずつ話し合うように指示されたという。部隊は人と人との繋がりが一番大事という考えから、その第一歩はお互い知り合うことであると信じ実行を命じられた。

○ 東部ニューギニア…第18軍の戦い
ニューギニアの戦いは、戦争中に「ジャワの極楽、ビルマの地獄、生きて帰れぬニューギニア」と言われ、帝国陸軍が舐めたあらゆる惨害を集約したのが、東部ニューギニア戦場だと言われている。先生も「ニューギニアの戦争は、初めから戦理を無視した無鉄砲極まりない戦いだっ」と言われている。その概要は、フィリピンを追われた米軍が本格的に昭和17年の11月に反撃作戦を開始、ニミッツは太平洋から、マッカーサーは陸地(島)沿いに東部ニューギニア、西部ニューギニア、沖繩と作戦を進める。これに対し第18軍は

ラバウルがあるニューブリテン島とともに、持久を策した戦いを企図した。安達軍司令官は力が残っている間は、何としてでもマッカーサー軍を牽制し正面に拘束、西進を遅らせ本土防衛に寄与したいとの思いの下、制空権・制海権を完全に米軍に奪われている中、19年4月のアイタペ作戦が終わるまで約2年余阻止した。日本軍はこの戦いに15万人を投入し、13万名が戦死し、終戦後の帰還者は約1万人、その後5年の内に半分になったという。戦死者の内、栄養失調による餓死は65%、それほど悲惨な戦いだった。何う前に本を2冊読み、少しは会話をと思い「持久目的ならば、ニューブリテン島・ウンボイ島との間、一番狭いダンピール海峡付近に盤踞して米軍を通さない戦い方があったのでは? どうして、転進、転進の戦いになったのでしょうか?」と今思えば生意気な質問をしてしまった。先生はそれからそれぞれの作戦の意義、そうせざるを得なかった経緯、その時の判断等を滔々と述べられた。その時100歳直前の時であったが、記憶、その理路整然としたお話に只々感服の至りだった。

先生は、合計17回遺骨収集等のために現地に行かれている。原住民には、日本軍の侵攻・占領で平和な生活を送つたり破壊し大変迷惑をかけたので、恩返ししたい思いで日本との友好に尽力されている。当時接した少年が立派な青年となり再会した時の話。現地に案内されると豊かな椰子林、カカオ、道路、商店を見て青年に「当時と比べると随分良くなったね。豪州に色々やってみたら良かったなあ」に青年は「いやオーストラリアはフレンド、ジャパニーズはブラザーだ」と答えた。何故? 「日本人は同じものを一緒に食べ、肌を寄せ合わせて一緒に寝たではないか」。当時教会があり、住民はクリスチャンが多く教会には入れるが、白人の牧師の私生活には近づけない。自分達とは別な人間として扱われていた。日本人に初めて人間として遇してもらったということらしい。その他安達軍司令官の統率、頑張った兵士への感謝、ウジまで食べた悲惨な食料事情等教訓となる事項が尽きない。中でも「堀江、お前腹を切れ」と言われればすぐにも腹を切れるというぐらい心から敬愛する4期先輩の田中兼五郎元東部方面総

監との出会い、亡くなられて30年以上が経つが、未だ春秋のお彼岸には必ず墓に参られている。それらの話を心の奥に留めていたが、数年の間日南会での近況報告程度で過ぎていった。

3 再会、その思いに触れて
○ 再会
帰国して、約2カ月後の8月下旬、成城の自宅に11時頃お伺いした。先生は105歳、一時体調も崩されたと伺っていたが、今は体調も回復され、最後にお会いした5年前と殆ど変わらない姿だった。ご挨拶すると、私に来るのを待ちかねたように確りと握手され、歓迎して頂いた。早速、昼まで約1時間遺骨収集への思いを熱く語られた。今伝えておかなければの思いをひしひしと感じた。

・当時、戦死した戦友の処置についてあとで家族に返すために、手首又は指を切って保存し持ち帰った。また、戦場のある地域に墓標等、目印を立て後でわかるように努められたという。

・勝ち戦なら、遺骨を家族の元に戻すことはできるが、負け戦ではかなり難しい。



ニューギニア現地慰霊：中央が堀江先生

・玉碎ならば、まだ遺骨が散らばっていないので何とかできるが、ニューギニアのように数千キロ（ある部隊は食料のない中、道なき道を2500キロ以上を歩いた部隊もあった）に及ぶ転進、転進の連続でどこに誰の遺骨があるかを探して当てるのは非常に困難を伴う。このような話、戦う軍隊ならば必ず考えておかなければならないが、恥ずかしながら初めて聞く話だった。

「このままじゃ、死んでも死に切れん！ 何としてでも戦友のご遺骨を家族の元へ！」

1時間が瞬く間に過ぎてお昼を頂いた後、それからまた約2時間先生は熱く語られた。先生は戦後、憲法改正、靖國神社への天皇陛下の御親

拝、総理等の参拝の憲法への明記等国の根本に関わる問題への取り組みと共に、過酷を極めたニューギニアで一命を国に捧げた13万英霊の慰霊顕彰と「草蒸屍水漬屍」となって帰国の日を待ち焦がれるご遺骨の早期帰還に力を尽くしてこられた。

そして前述のようにパプアニューギニアとの友好関係の促進維持にも同様に尽力されている。それはニューギニアの特性から長大な地域に点々と眠る遺骨を辿るには、現地の村の聞き取り等地道な努力が必要であり、そのために現地の人と友好関係を維持し協力を頂くことが不可欠との思いもあつたであろう。先生は、今までの充実した人生に一点の悔いもないけれど、ご遺骨の帰還に関して「残された時間が少ない」という強い焦燥感を持たれている。ニューギニアの遺骨収集に永年中核となつて尽力された方達がほとんどなくなり、今では80代の方4人が残るだけという。先生は、3年前隊友会の協力を頂いたことに感謝されているが、今も帰国の日を待ち望んでおられるご遺骨全員の思いを実現するためにしっかりと体制を作りたいと、焦燥の思いは深いように感じら

れた。それでも、106年の人生の生き様を映すかのように今できることに懸命に取り組まれている。それを書き残すことで1日の大半を使われているという。約2時間思いの丈を語られた後、少しお疲れが見えたので辞めることを告げると、最後にまた思いを込めて「このままじゃ、死んでも死に切れん！ 何としてでも戦友のご遺骨を家族の元へ！」と私の目を見据え話された。道筋を作っておきたいという魂がほとばしるような強い思いを受け止めた。

4 思いを継ぐ（繋ぐ）

○ 硫黄島椿

私が硫黄島現地教育に従事した時、遺族の思いを伝える次のようなお話を伺った。私は、硫黄島出発前の事前教育120名の学生に対し、何とかに残る教育をと紹介した。

昭和60年頃富士学校の硫黄島研修が始まり、現地に行けない遺族の千葉の上品な老夫人から硫黄島に椿を植樹するよう依頼された。夫人は、大阪山を準備した独立機関銃第1大隊第3中隊所屬の板倉少尉のお姉さんであった。彼は22歳、早稲田出身の大柄で俳優の中井貴一に似た好男

子であった。愈々戦場への出立の前「口紅を買いたいから姉さんつけてきてくれ」と頼まれた。戦地と言っても色々あるから、「芸者さんにあるの？」と尋ねる姉に「違ふよ、敵が攻めてきた時、恐くて唇が青くなったら部下への手前がある。この口紅をつけて戦うんだ」と答えた。これが夫人にとって弟の最後の姿となった。その弟から昭和19年10月に「殺風景な陣中生活で故郷を偲ぶ縁にカボチャの種を送って欲しい」と手紙を受け取った。しかし戦況の急迫でついに送ることができず終戦を迎えた。板倉少尉の戦闘の状況、いつ戦死したのか資料に残っていない。硫黄島西翼の堅陣大阪山の戦闘の概要は、20年2月19日に上陸した米第5海兵師団の3個大隊が1キロ以上の正面に攻めてきた。3月2日大阪山を奪取されたが、約2週間持ちこたえた。その後3月4日残存兵力をもつて夜間挺身攻撃し玉碎した。もしかしたら、弟は最後に赤き口紅を付けて軍刀を振りかざし戦死したのかも知れない。夫人は父親も中国戦線で亡くし、姉妹二人となった。赤き口紅を付けて祖国防衛に奮戦した弟が、誰からも忘れ去られ二人の

胸の内の存在となった。これが肉親としていかにも辛く、40年間悩み続けた。また最後の願ひ「カボチャの種」を叶えられなかったことも心に残り、どうしても願ひを叶えたいという思いが募った。それで硫黄島の風土に何が良いかと考え「赤き口紅」のこともあり、椿の植樹を依頼された。昭和62年に20本が植えられたものの根つかず今は1本も残っていない。夫人にお伝えすると「椿は、私の40年越しの切なる願ひが籠っているのです。思い残すことはありません」と涙が止まらなかつたという。

○ 思いを繋ぐ、

冒頭の「父と娘の戦後50年…」の概要を紹介すると、それは27年前の出来事だつた。戦後50年を経ても、父はニューギニアのことを語ろうとしていない。娘としては、その父の精神ルーツを知りたいと思つてた。そこに新聞に載つたパプアニューギニア慰霊ツアーの記事を父が見つけた。「50年間自分の胸にしまつておいたものが、一気に噴き出したような衝動にかられた」のか父は参加することを決め、その旅に娘二人も同行することを希望した。首都ポートモレスビーに降り立ちマダ

ン、カウプを巡る旅だつた。マダンで日本・パプアニューギニア友好親善の夕べに参加した。そこで初代首相、国父と呼ばれたサー・マイケル・ソマレ卿を知る。そしてソマレ卿が子供時代を過ごした村カウプを訪れた。そこは父の聯隊が自活していた場所だつた。ここで生活させても

らつて居るお札に、寺子屋を作つて10歳前後の子供たちに算数や歌を教えた。その教え子の一人がソマレ卿であつた。そして密林の中に踏み込んだ時道に迷つた。その時、一人の青年に助けられ村までカヌーで送つてくれた。その青年は、偶然にも父が最も親しかつた村の酋長アンドワリーの孫だつた。浅野さんは、この27年前の旅の記録を一昨年夏にブログに公開した。すると昨年の3月に現地在住の日本人から突然メールが届いた。メールには2月下旬ソマレ卿が亡くなつたこと、今ソマレ卿の追悼文を書いているところ検索したらこのブログに辿りついた。そして昨年ラバウルで追悼式典を開催したこと、先人の苦勞があつて今の自分達があると感じているとのことだつた。26年前の体験を言葉にする

繋がつた。浅野さんは、「ツイッターを使う人は戦争経験者は少ないと思われるが、この種の投稿に対し思いがけない反応がある」とのこと。私はこれだと思つた。記憶や記録を言葉にして伝えていく大切さを改めて感じた。

○ 思いを継ぐ

日露戦争から117年、先の大戦から77年、時の移ろいとともに人の心も移ろい少しずつ忘れ去られる。しかしながらその時代を生きた人々が受け止めた思い、若くして国に命を捧げ自分のやりたかつたことがでさなかつた無念、祖国防衛に捧げた肉親の小さい望みさえ叶えてあげられなかつた家族の思い。彼らは家族のため、国のために気高い勇気を示し勇敢に戦つた。その一方で家族と別れ、心ならずも異国の地で散らなければならなかつた。数多の英霊達には、その数だけこのようなドラマがあるに違いない。彼らの死は犬死であるはずがない。その生き方と死を意味あるものにするためにも、今の時代を生きる者は英霊達に感謝し忘れてはならない。そのため何ができるか？人は日々の生活に懸命で歴史に触れる機会も心の余裕もな

いかもしれない。それでも心ある者が書くことで発信し、そして現地に赴けば思わぬことで人々の輪が繋がるに違いない。それが時代を超えて「思いを継ぐ」ことに繋がるのではないだろうか。そのことを信じ今できることをやってみよう。

5 大正生まれの星一つ消ゆ

漸く文章の推敲が終わり投稿しようと考えていた2022年3月下旬、堀江先生のご長男高橋正純氏から、「3月20日父正夫が静かに息を引き取りました。106歳でした」の訃報を頂いた。先生には年賀でお会いしたのが最後になつた。コロナが少し収まれば4月に何う予定だつた。今振り返ると昨年の夏、最後の思いを振り絞り、託すように話されたあの姿は……？

軍人として、政治家として国のために戦い、また古稀以降も英霊の顕彰とご遺骨の帰還に至誠を尽くされた106年の先生の生き方。4元号を生きた「大正生まれの星」が一つ消えた。その姿に心より敬意を表し、ご冥福をお祈り致します。きつと思いを継ぎ(繋ぎ)ます。